

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第九主日(7/18)礼拝
「真の王」ルカ福音書第23章1節から12節

【聖書】

ルカによる福音書 23:1 そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。2 そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」3 そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。4 ピラトは祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。5 しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。6 これを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、7 ヘロデの支配下にあることを知ると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデも当時、エルサレムに滞在していたのである。8 彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。9 それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。10 祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。11 ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。12 この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

1 皮肉な描き方

主イエスの裁きが続きます。偽りに満ちた不正な裁判が描かれているのですが、今日の聖書テキストをギリシャ語で読み、驚きました。主の復活物語に出て来る言葉がちりばめられているのです。例えば、23:1節の「全会衆は立ち上がり」の「立ち上がり」と訳されている言葉は、主が三日目に甦られた時に使われている単語です。更に、8節、ヘロデがイエスを見て、「非常に喜んだ」とある「喜ぶ」とは、甦りの主イエスと出会った弟子達が「喜ぶ」のと同じ単語です。又、10節の「そこにいて」も直訳すれば、「そこに立って」。しっかりとした考えの中に立つ様子を表す言葉が使われています。ですが、ここでしっかりと神の御前に立っていたのは、主イエスお一人。他の祭司長達や律法学者、長老達というユダヤ当局者、群衆、ローマ総督ピラト、ガリラヤ領主ヘロデとその兵士達は、自分達が何をしている

のか、どこに向かおうとしているのかも全く分かっていません。領主ヘロデの喜びは自己中心的な虚しい喜び、復活の主と出会った弟子達の喜びとは全く違います。自分の思いの虜となって滅びに向かう人々の様子を描き出すのに、ルカは甦りの物語で使われる言葉を使う。愚か極まりない人間の本質を痛烈に皮肉り、私たち人間の罪深さを浮き彫りにしているようです。

そんな今日の物語は、ユダヤ人の議会であり、最高裁判所でもある「最高法院」から始まります。早朝の議場に「この男は、自ら神の子だ、と認めた、我らの神、神聖なる全知全能の御神を侮辱した。証拠など要らぬ。このような者は地上から絶たれねばならぬ」と言う告発者達の朗々とした声が響き渡ります。その場にいた全会衆、祭司長や律法学者、長老達だけではなく、噂を聞いて集まった人々までもが、告発者の言葉にざわめきます。律法では客観的な証人が重視され、自白だけでは有罪判決は下せない事など問題とは考えていないようです。自分達が持っている権利や利益を守る為、神の掟を曲げて恥じる処がない。しかし、いつの世も群衆は、感情に訴える分かりやすく単純で表面的な言葉を好みます。あらぬ敵を造り出し、過度に不安を煽る言葉が大好きです。そんなデマゴグに巻き込まれた時、わたし達の目はふさがれてしまいます。現代世界でも繰り返し見られる事です。トランプ前大統領に扇動され連邦議会になだれ込んだ群衆など良い例です。人間の本質は2000年経っても変わっていない事がよく分かります。サタンはその事をよく知っており、そこにつけ込みます。主イエスの受難物語を読む度に、自分自身で考える事を放棄してはいけない、その為にも神に祈り続けねばならない、とつくづく思わされます。キリスト・イエスに従って生きるという事は、権力者達の声に惑わされず、表面的な事に目を奪われる事なく、物事の本質を見ようとする姿勢、神のみ旨を求めて生きようとする姿勢を保つ事ではないかと思わされます。

2 総督官邸へ

しかし2000年前の過越祭の朝は違いました。そこにいた全ての者達が偽りの言葉に力を得て、主をローマ総督のもとに引っ立てて行こうと立ち上がります。自分達の救いへと立ち上がったつもりだった、だが、それは滅びの道でした。ユダヤ当局者達が、自分達の権威や利益を守りたいばかりに企んだ罠にまんまと利用された人々。彼らは、主イエスを犯罪人のように後ろ手に縛り、手荒く小突き回し罵りつつ、ローマ総督の官邸への道を行行したのでしょう。夜が明けるまで大祭司の手下達になぶりものにされて不正な裁判にかけられたのですから、主はかなりやつれ果てていました。周りの者に

は、反抗する力さえも失い、全てを諦めて屠殺場に引かれていく羊のように見えたかもしれません。しかし、主の瞳は光を失わってはおられなかった。イエスは、その内に人間が伺い知れない深みを抱き、静かにたたずむ湖のような眼差しでおられたのではないかと想像します。目の前で繰り広げられる偽りの審きの首謀者達をも、主は、ご自身の眼差しの内にいれておられた。自分の民に裁かれつつも、なおも、彼らのキリスト、彼らの真の王として歩まれ、憐みの眼差しを彼らから反らすことはなかったのだと思います。

さて、ローマ総督は、普段はエルサレムにはいません。地中海沿岸の都市、カイサリアにいました。ただユダヤの人々が宗教的に最も興奮する祭りの期間中は、万一に備えてエルサレムに駐屯していたようです。神殿の背後にそびえるアントニア要塞がローマ軍のエルサレムでの駐屯地でした。主イエスは、そこに連行されたと考えられています。当時のローマ総督、ポンティオ・ピラト。彼は、主の受難物語では、ユダヤ当局者の思惑を見抜き、イエスを死刑にする事に最後まで反対した唯一の人物として描かれています。ここだけ見れば公平で優れた行政官のようです。しかし、実態は冷徹で暴虐な支配者、イスラエルの人々から忌み嫌われていたようです。ルカによる福音書でも、ピラトが自分達ローマの神々に捧げる生贄に、ガリラヤ人の血を混ぜた、という報告があります。ガリラヤ地方は、ユダヤ民族主義的な運動が盛んな地で、ローマへの反乱が繰り返し起こっていました。そんなガリラヤ人への見せしめのため、ピラトは、ガリラヤ人を捕らえ自分達の神々の生贄として殺すという、残忍な事をしました。実際、彼は主イエスの十字架と復活から数年後、サマリア人を虐殺したとして、総督の地位を追われています。ポンティオ・ピラトは、神への恐れ、命への畏敬など一片もない、冷徹で残虐な支配者でした。

その彼が、ここでは唯一、主の無罪を見抜くと言うのも、皮肉な話。あの残忍で冷徹なピラトでさえも見抜き躊躇うような事をユダヤ権力者達は恥ずかし気もなく行っている、神の民の徹底した不正が、皮肉な言葉で暴き出されます。当然、主を訴える言葉も偽りです。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」主が皇帝に税を納めるのを禁じた、とは、全くの作り事。主が「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と仰った鮮やかな智慧の言葉を、祭司長達が忘れる筈はありません。ここで祭司長達は明らかに意図的な嘘をついているのです。「神の子と名乗った」では、ピラトを説得してイエスを死刑にはできない、ありもしないローマ皇帝への反乱の罪をでっちあげました。祭司長とは、民衆に代わり神の御前に入る祭司たちの指導者、なによりも神の正義に生きなくてはならぬ者達が、偽りの罪で

無実の人を死に追いやろうとしています。

反乱の訴えを聞いたピラトは主イエスを尋問します。「お前がユダヤ人の王なのか」ピラトの関心は、メシア・キリスト等というものにはない、現実にローマ帝国を打倒し、この地の支配者になろうとしているか否か?のみ。主の答えは、「それは、あなたが言っていることです」。相手に考えさせるような語り口です。ローマ帝国を悪と決めつけ非難する反乱分子の言葉ではありません。だから、ピラトは、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と祭司長達に、主の無罪を宣言します。ですが、ユダヤ当局者達はあきらめない、これを逃すとイエスを殺すチャンスはないのですから、必死です。「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い立てます。

3 扇動者イエス?

これもまた、なんとも皮肉な事ですが、主イエスをどうにかして殺したいユダヤ当局者達が、総督ピラトの前で、主イエスとは何者で、これまで何をしてくられたか?について、自分達の意図に反して真実を語っています。ガリラヤ地方からエルサレムに至る村々、町々で主イエスは何をされたか?社会からはじき出され見捨てられた重い皮膚病や様々なハンディキャップに苦しむ人々を癒してこられた、娼婦や徴税人、律法を守れず罪人と呼ばれていた人々など、皆が忌み嫌う者達に友として寄り添って来られます。そして、主は、その言葉と行いで神の国を宣べ伝えてきました。「神の国がもうあなた方の所に来ている、あなたがたは神の御支配に生きることができる」と力強く教えられました。主イエスが示す神の正義なる愛、愛なる正義の力はすさまじく、出会った人を変えずにはおられなかった、ルカ福音書だけでも、主によって大きく変えられた人々が、数多く描かれています。ペトロはじめ弟子たち、徴税人のザアカイ、長い間出血の病を患った女性、娘を生き返らせてもらった会堂長、ナインのやもめ、足が萎えた人、手が萎えた人、腰の曲がった人、目の見えない人、耳の聞こえない人、名もなき多くの老若男女、生きる事に苦しむ人々が、主イエスによって父なる御神の愛の内に引き戻され、癒され変えられます。しかし、洗脳ではありません。神を知った者として、神に生かされた者として、自ら祈り、自ら考えるようにしてくださる、神の愛の内に引き戻されるから安心して祈り考え、自分の人生を歩み始めるのです。それは祭司長や長老達、律法学者達、人の造った社会の権力者達にとっては、非常に都合の悪い事です。人間の権力者達にとっては、民衆に一人一人が、神と結びつき考えるようになる事などもってのほか。これも又、現

代の権力者達にみられる傾向です。民衆一人一人が自分達で考えてたら、自分達の地位や権力、利益が脅かされる。だから権力者は真実を隠蔽し人々に考えさせないようにしがちです。森友学園で公文書を書き換えさせ良心的な行政官を死に追いやったキャリア官僚を出世させる首相官邸、コロナ禍で行うオリンピックの情報を公開しない政権もそのよい例です。そんな権力者達にとっては、まさに主イエスは「民衆を扇動」する者でした。この言葉こそ、イエスに出会い次々と変えられる神の愛と義の力の大きさを、サタンが言い表すにぴったりな言葉でしょう

4 領主ヘロデ

さて、イエスがガリラヤ人と知ったピラトはほっとしたでしょう。これで厄介払いが出来る、というばかりに、ガリラヤの領主ヘロデの所へ主イエスを送ります。領主ヘロデ。この人物も又、福音書ではおなじみの一人。ヘロデ大王の息子の一人で父からガリラヤとペレア地方を引き継ぎます。しかし、父親ほど優れた政治家ではなく、ローマ帝国から「王」と名乗る事を許されず、「領主」に留まります。が本人は王のようにふるまっていました。腹違いの兄弟の妻ヘロディアに恋をし、横取りして結婚するのですが、洗礼者ヨハネに責められたので、洗礼者を殺してしまいます。主イエスをも殺そうと狙っていた事がルカ福音書には描かれています。その一方で、ヘロデは、あちこちで不思議な業を行うイエスに好奇心を刺激され、一度会ってその業を見てみたいと望んでいました。ですから、思いがけずピラトのもとからイエスが送られてきた時は、「噂の男が来た、不思議な業がすぐに見たい！」と子どものようなはしゃぎようであったのでしょう。しかし、主イエスはヘロデに何を尋ねられても一言の返答もしません。代わりに、日ごろからうるさくて煙たい律法学者達が大声で「メシアがどうだ、神の子がああだ」とわめきたてます。「そんな事はどうでもよい！ただ、余はこの男の奇跡が見てみたいだけじゃ！」冷酷非道の支配者であったピラトでさえ、ユダヤ当局者達の思惑通りには動かされないように、慎重に主イエスを観察し考えました。が、領主ヘロデは、はなから何も考えようともせず、自分の欲望を叶えることだけ。だからでしょう、主はヘロデには一言もお答えになりませんでした。

沈黙する主を前にヘロデは、「それじゃあ、別の遊びをしよう」ばかりに兵士達にけしかけ、自分も一緒になって主イエスをなぶり者とします。最後には、けばけばしい衣を着せます。形だけは王の服を模した衣ですが、一見して安物と判る派手な衣をまとわせ、ピラトのもとへと送り返します。「お前達はこんな憐れでみっともない男を王だと恐れているのか？」祭司長や律

法学者達をも せせら嗤うへロデでした。しかし、此れも又なんとも皮肉な事ではありますが、主イエスが王の衣をまとわされて、領主へロデのもとから総督ピラトのもとへと送り返された事にも、神の真実が現れているように思います。どのような真実でしょうか？

主イエス・キリストが、真の王という真実です。へロデと兵士達はイエスを貶めて着せた王の衣装が、主イエスが何者であるかを明らかにしました。「お前がユダヤ人の王なのか」というピラトの問いかけに、領主へロデがそうとは知らず「そうだ、この男こそ、神の民イスラエルの王、メシア・キリストだ」と答えたようではありませんか。なんとも不思議な神のなさりよう。

5 主イエスの玉座

へロデのもとから、ペラペラの王の装束を着せられてピラトのもとへと送り返されるイエス。惨めで滑稽な姿。そこにある真実を知っていたのは主イエスお一人。主は、イスラエルの玉座、神の民を治める玉座に今、登ろうとしておられます。まるで真実の王冠を受ける為に、ローマ皇帝の代理、ピラトの前に立とうとしているようです。世界の救い主となるために。それでは、主イエスが座ろうとされている玉座は何なのでしょう。

十字架でありましょう。神の栄光が満ち溢れた玉座ではありません。神の怒りが激しく注がれる玉座。その怒りに耐えられるのは、ただ一人の人・イエスのみ。神の御子、神と等しい方でなければ耐えられぬ玉座です。自分達を神と思いたがり、自分達で王位に坐りたがり、その為には神に偽りを言う事さえ辞さない私達人間。考える事を放棄し、体制に倣って正義を曲げて、自分達の安全を図りたい私達。罪に囚われている私達の代わりに、私達の代表である王として、罪なき方が死にその身を渡す代わりに私達を神のものとしてくださった。私達を買取って、神の者としてくださる、その為に今、十字架という真の王の玉座に着こうとされている、それが主の不正な裁判の真の姿です。

人間の王は、罰する事によって人々を支配しますが、真の王・キリストは、罪を自ら肩代わりし、赦す事によって人々を解き放ちます。人間の王は、自分達に都合のよい正義を主張しますが、真の王・キリストは、私達が真理を求め、それぞれ考えるように促します。人間の王は、自分の力を誇りますが、真の王・キリストは、自分に働かれる神を誇ります。人間の王は、自分達の秩序を変える事を嫌いますが、真の王・キリストは、神の国を目指して私たちが変わってゆき、社会を変えていくことを大いに喜ばれます。人間の王は、

自分達の支配が続く事を願い策略を用いますが、真の王・キリストは、神の支配に揺らぎなく立ちます。人間の王は、弱く小さい者達、何の利益をもたらさない者達を無視したり利用したりしますが、真の王・キリストは、寄り添って決して見捨てません。人間の王はどんな命をも尊いとはできませんが、真の王・キリストは、神が造られた命を無条件で喜ばれます。人間の王は、力で支配する事に於いて王ですが、真の王・キリストは、愛すること、赦す事に於いて正しい事をなす王です。人間の王は、自分達に都合のよい裁きをしますが、真の王・キリストは、正しくわたし達を審く事に於いても、愛の御業を行われます。

だからこそ、私たちもまた、偽りの人間の王に従うのではなく、真の王、真のメシア・キリストに従っていきたい、主を真の王として頂き、その支配の内に歩んでいきたいと切に祈り願います。神に赦されてある喜びがありますように。